

Title	サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について
Sub Title	On the relationship between Samrong-Sen site in Cambodia and the Bronze age culture
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.2 (1968. 9) ,p.111(283)- 122(294)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680900-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について

近 森 正

[I]

東南アジア先史学上の一つの標準遺蹟として知られるサムロン・セン貝塚はカンボジアのほぼ中央、大湖の南東、トンレ・サップ河の支流 Stung Chinit 川の右岸に位置する。(第1図) 一九六五年から昨年八月まで、二ヶ年のカンボジア滞在中に収集した資料と、昨年四月減水期のトンレ・サップ河と Stung Chinit 川を遡行して行なつた踏査にもとづき考察する。

(立地・地形) サムロン・セン貝塚はトンレ・サップ河の形成する沖積平野を望む、比高約5m、長径(南北)350m、短径(東西)180~200mの歪楕円形の独立丘陵の上、及び斜面にある。丘陵の頂部にはパゴダが立ち、丘の北斜面から Stung Chinit 川沿いにかけて、高さ5~6mもある杭上家屋が四〇戸余り密集してクメール人の漁村を形づくっている。この附近一帯は土地が低湿で、丘陵は五月末~十一月まで半年間は完全にシーズナルな洪水にとり囲まれる。この住民は乾期の一二月~五月、檳椰子と一緒に噛む石灰や、家屋の壁に用いる石灰をとるために貝塚の貝

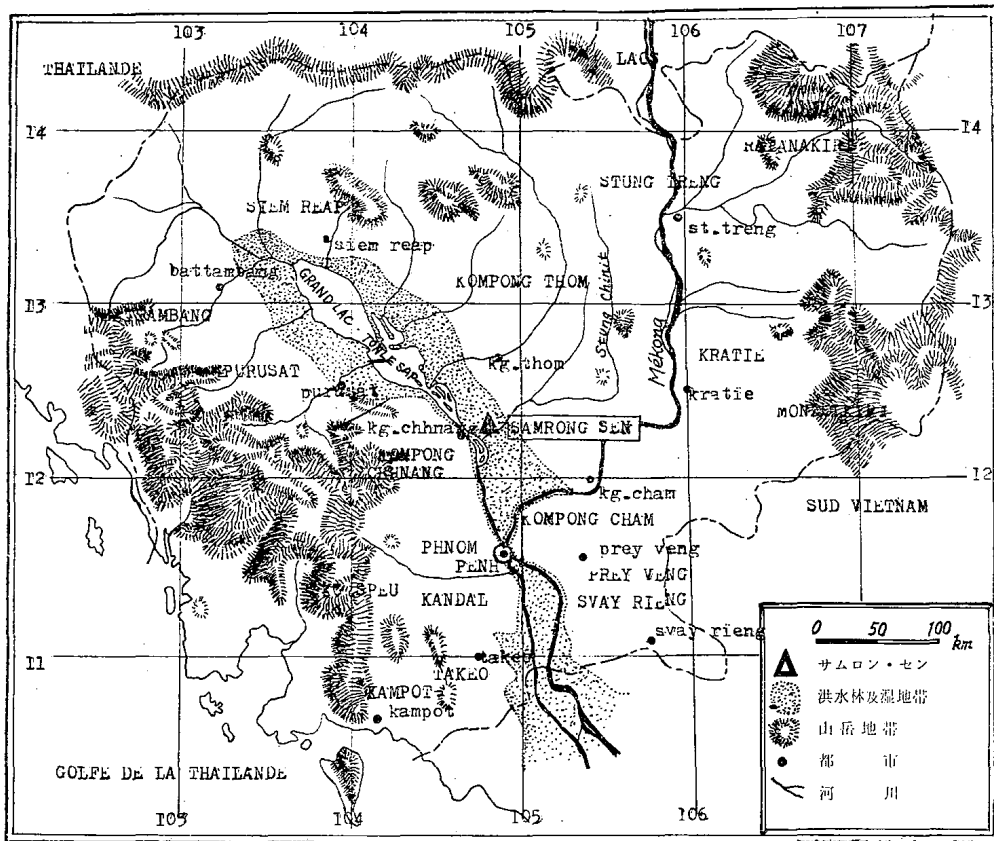
サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について

を採る。そのために丘陵の斜面は極めて不規則な凹凸が出来、貝層の破損も著しい。(第2・3図)

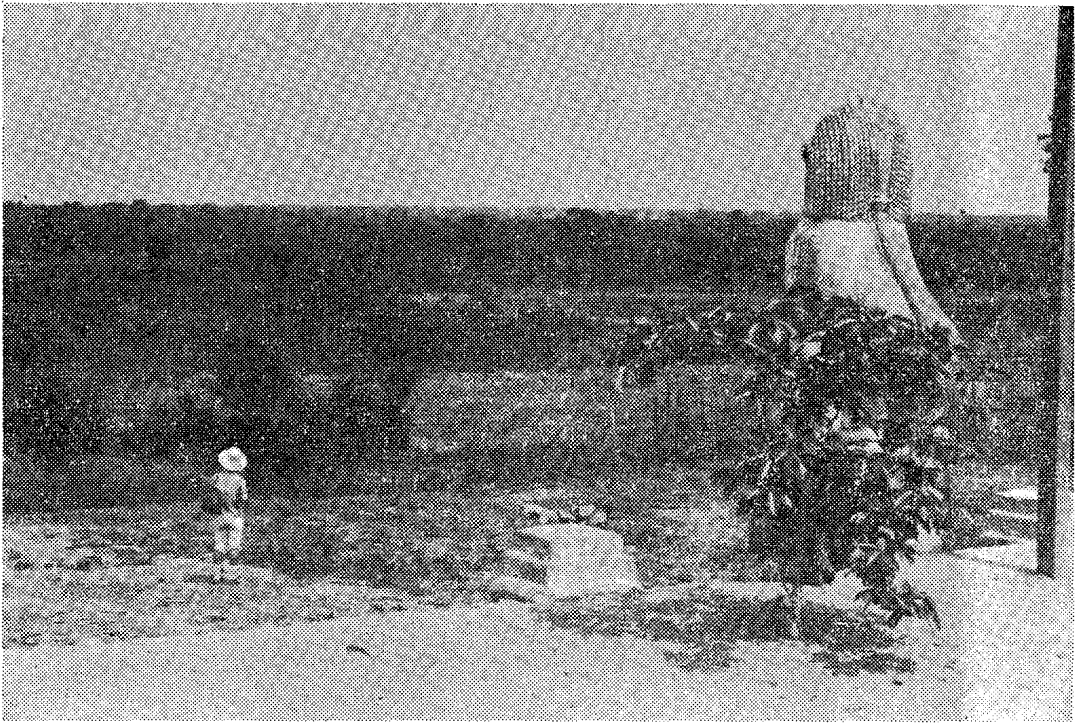
(貝層の状態) 貝塚の堆積状態をみると表土にあたる有機土は黒色または濃灰色を呈し、その厚さは1日に及ぶところがあるが、概して、表土は洪水のため、また人為的に移動している。この層の下は粘土と破砕貝片を混合した混土貝層であつて、全体に灰色を帯び、厚さは30~50cm前後。その中には、シジミなどの貝類、人骨片、獣骨などが混在している。その下の層は軽石状の硅土質の貝層。色は赤味を帯びていて層の厚さは4~5m。シジミ、ニナなどを八〇%位含む淡水産貝類がぎつしりつまり、直径50~60cmのブロック状の堆積を示めている。この層には土器、石器、獣骨が最も多い。部分的に焼土や灰が介在している。最も層の厚い部分は6日に達し、層の下底部では、ローム性を帯びた泥土層に達する。H. Mansuy の報告では、深さ5m70cmで水が湧出している。⁽¹⁾この貝塚を構成している自然遺物としての貝類や、動物の骨に、海産のものがみあたらない点は、遺蹟の先史環境の復原に大きな意味をもっている。ただし、加工品には海

産のものがある。従つて、この遺蹟は附近が完全に陸化した後、すなわちメコン河とトンレ・サップ湖が合着し、海岸線からの間隔が、相当にひろがつた後に形成されたものであることを物語っている。

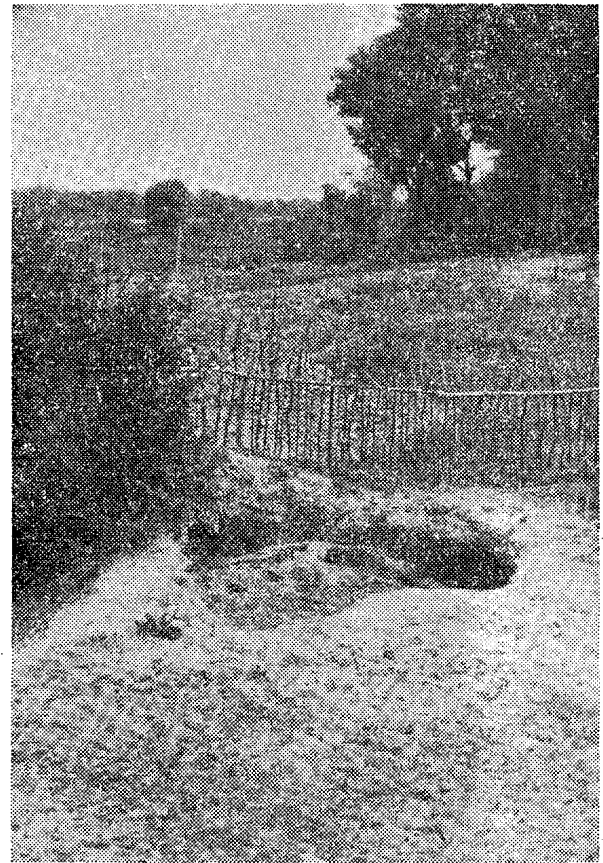
(研究史的反省) サムロン・センはインドシナで最も早く調査が行なわれた先史時代遺蹟の一つである。しかし、その文化階程や文化内容については、従来の研究は、はなはだ不明確なものしか与えていない。とりわけ、金属器との共存関係については明瞭さを欠いている。H. Mansy によると、サムロン・センの発見は、Rogue という人によつて一八七六年になされたというが、何らの記録もない。(2)その後、翌年に M. Ratte が、一八七七年には Moura が、一八七九年には Dr. Corre が、一八八二年には Edmond Fuchs が、一八八七、八にかけしては Ludovic James がそれぞれこの遺蹟を訪れているが、大した成果をもたらしていない。正式な最初の発掘調査はフランス極東学院が出来てから初代極東部室長 Finot のもとで、一九〇一年に Henri Mansy によつて行なわれた。この調査で Mansy は、四〇〇立方メートル近くを掘り上げ、一部は貝塚の基盤の湧水点にまで達している。この発掘で多くの獣骨、人骨、二〇〇に近い有肩石斧を含む石器類、数千点に及ぶ土器片、完形土器三点が発掘され、この時村人から、柄と翼のある銅鏃、断面楕円形のベル二点など青銅器四点を得ている。(8)その後一九二三年に Mansy は二度目の発掘を行い、第一次の際と同様の結果を得たが、記録され



第 1 図



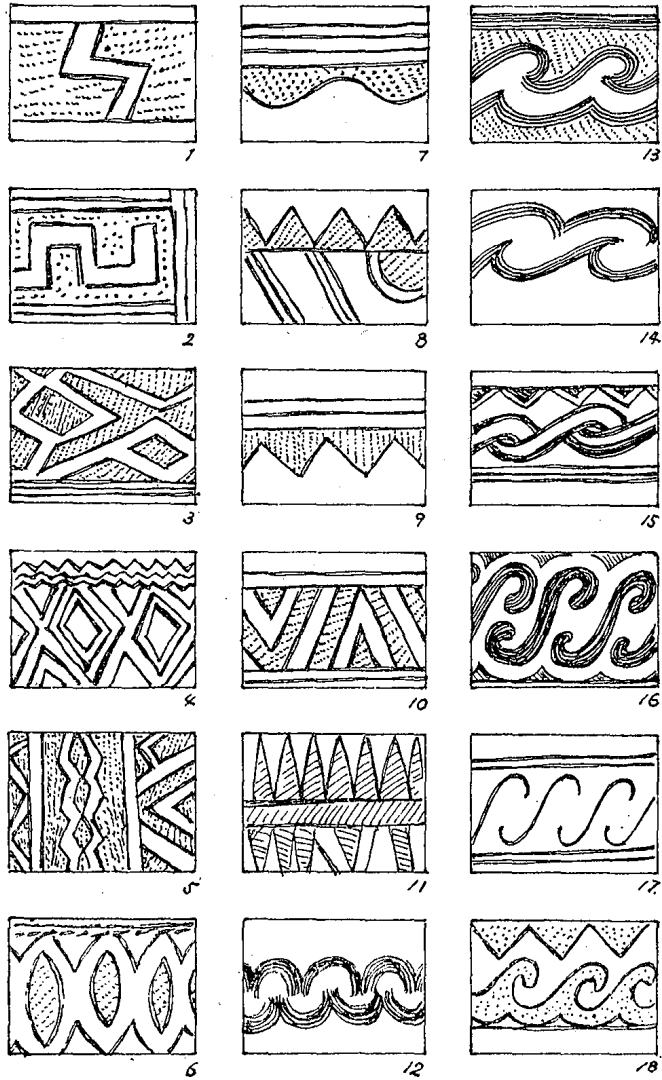
第2図 サムロン・セン貝塚丘陵上より南方の洪水林地帯を望む



第3図 サムロン・セン貝塚西斜面ピット

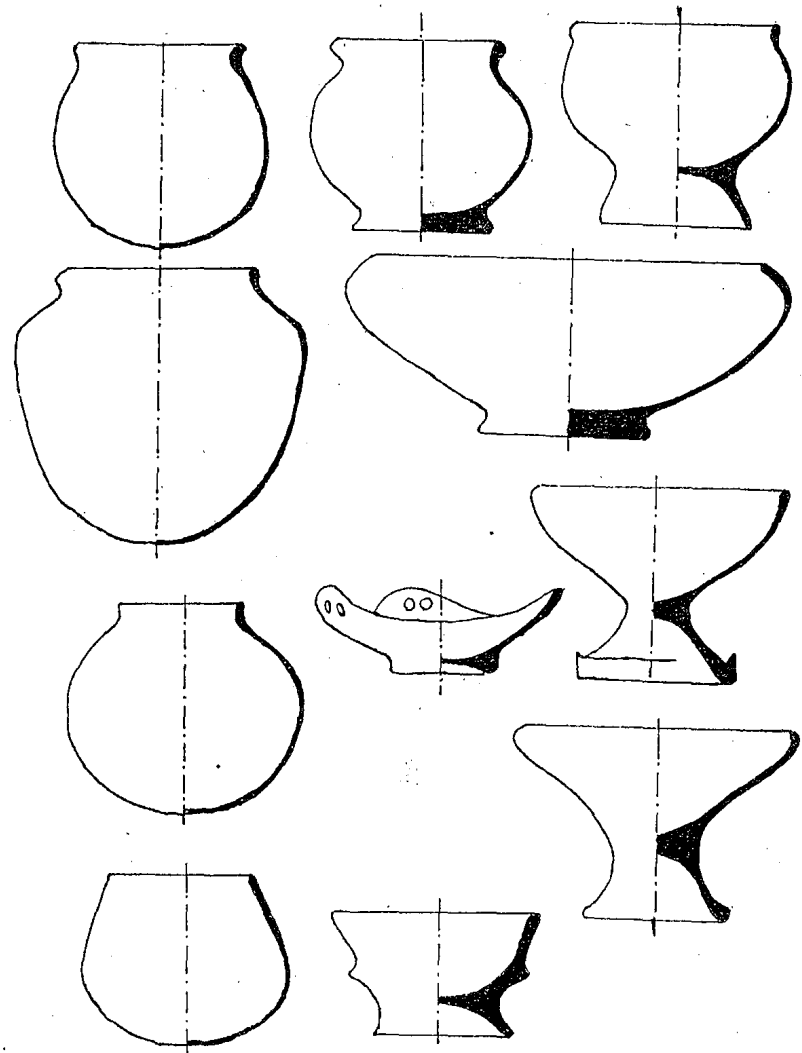
た遺物のうちに青銅斧、釣針、ベルなど五点の青銅器が含まれている。そのうち四点は、村人から購入しているが、残りの一点については、出所が明らかにされていない。⁽⁹⁾一九三五年に至つて Olov Janse が試掘のためのトレンチを入れたことが報告された。その発掘の詳細は報告されていないが、その予備的報告の中で、Janse は中国の漢代に平行する青銅器を得たことを述べている。しかし、その考古学的証拠については何の記載もない。⁽¹⁰⁾こうしてみると、サムロン・センが、長い間注目されてきた重要な遺蹟であるにもかかわらず、青銅器文化との関連について、まず現在の考古学的研究にたえうるような科学的な発掘結果は、

サムロン・セン貝塚出土器文様分類模式図



第4図

サムロン・セン貝塚出土土器形態



第5図

まだ一度も得られていない。貝層から、発掘によつて青銅器が発見された確実な証拠は何もなく、従つてサムロン・セン貝塚の文化が石器時代終末期、あるいは金石併用期であるという実質的な証明はまだなされていないといわざるを得ないのが現状である。

そこで、青銅器そのものの検出をひとまずおいて、量的に最も多い土器について分析してみたい。(第4・5図)

(土器) 器形：土器の製作にはロクロは使われていない。手づくね、パドルによるいわゆるパディング手法によるもの。

《第一類》 平縁で丸底の甕、安定性の悪いもの。無文又は縄蓆文。(A)口縁部がくびれて頸部をもつもの。(B)頸部外反するもの。(C)直立するもの。

《第二類》 平縁で台部をもつもの。甕、浅鉢、皿。(A)口縁部がくびれて頸部をつくり、球形の甕、磨消沈線文、(B)内弯する口縁をもつ浅鉢、無文。(C)三つの山形把手が開く皿、無文。

《第三類》 第二類の台部の部分が発達して、その高さが器高の半以上に及ぶいわゆる高杯形 (A)高杯上部が球形の甕形をなすもの無文 (B)高杯上部が開いて浅鉢形をなすもの、沈線文、磨消文、無文。

口縁部：(A)直口するもの (B)内弯するもの (C)たが状の隆起線をめぐらすもの 口辺部に刻目文、より糸文を施したものがあ

る。
文様：文様のパターンは極めて豊富でかつ精巧である。(1)沈線文 (2)縄蓆文、捺糸圧痕文を含む (3)細隆線文 (4)櫛目文、平行

サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について

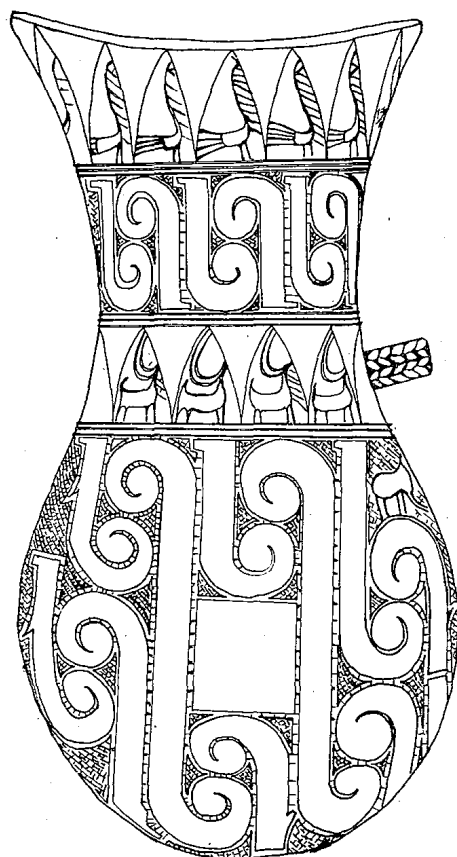
にひいたもの、波状文 (5)刻目文 (6)たが状隆起文、連続沈刻文、指頭連続圧痕文 (7)アナダラ貝類腹縁文 (8)条線文 (9)縄蓆文、沈線文、腹縁文などによつて構成される磨消文(渦状文、山形文、三角文) (10)刺突文。

以上器形と文様の組合せについて、周辺の遺蹟との比較を試みると、それは北ヴェトナムの Dong Son やメコン・デルタの Ocso の土器には類似性が求められない。ところがサムロン・センのサヤ形文 (greek fret) や帯状文、菱形文、突刺文、渦状文などをもつ土器は、南ヴェトナムの Sa-huynh 遺蹟との関係を示めしている。これらの要素はまた、マラヤのケラントンの Gua Cha 遺蹟⁽¹²⁾、フィリピン⁽¹³⁾の Visaya 諸島 (マヌバタ島など) Solheim の調査したもの⁽¹⁴⁾、ボルネオの Harrison の調査した Niah 洞窟遺蹟出土のもの⁽¹⁵⁾にもみとめられる。これらの土器複合は、Solheim の分類に従えば、東南アジアの新石器時代後晩期以降の三つの土器複合の一つ、Sa-huynh-Kalanay 土器複合に属している。このような点からサムロン・セン貝塚の土器文化が、Louis Malleret のいう Méditerranée asiatique の文化圏に加わり⁽¹⁶⁾、その一環をになつていたことは充分考えられるところである。サムロン・セン貝塚から出土した外洋性貝類の装飾品は、こうした交易などによる外海との交渉を示めしているものに他ならない。

さて、Sa-huynh-Kalanay 土器複合は一方において青銅器文化との関連を示めしていることが指摘されている。すなわち Malleret は、Sa-huynh の足つき土器と Gua Cha から出土した

土器との間に類似性を認めると同時に Sa-huyhnh の土器とドンソン青銅器の文様要素に類似点を指摘⁽¹⁷⁾、Solheim や Janse も Kalanay 及び Sa-huyhnh 出土の土器とドンソン青銅器との間の相互関係に注意している。⁽¹⁸⁾ ドンソン青銅器とこの土器複合との間には、特長的なモチーフを通して、たしかに類似性が示めされている。ただ、Dong-Son 遺蹟から発掘された土器は Sa-huyhnh-Kalanay 土器複合のカテゴリには含まれないものであり、また Sa-huyhnh から出土した青銅製品には典型的なドンソン青銅器を伴っていない。土器と青銅器の間にあるクロスした関係は何を示めているか問題は別に残るが、いずれにせよ、両者の間にある何らかの文化的な関連性は認めなければならぬだろう。

(ドンソン青銅器との関係) そこで次に、カンボジアにおけるドンソン青銅器文化の遺物に眼を転じてみる。そこには遺蹟として発見されたものはないが、現在までに Heger 第I型式の銅鼓二点、銅鐘、青銅容器、及び Conservation d'Angkor 所蔵の青銅製腕輪などの遺物が発見されている。これらのうちプノンペン郊外カンダル省から出土し、現在プノンペンの国立博物館に収蔵されている青銅容器に注目する必要がある。(第6図)この青銅容器は特異な器形(高さ35cm)をもち、器体表面には動物文様と、連続せずに対置的におかれたリボン様の渦状文、あるいは羊の角のような文様が施されている。この特異な文様要素は、また同時に Sa-huyhnh-Kalanay 土器複合の土器文様として一般的なパターンであり、サムロン・セン出土土器においても特徴的な



第6図 青銅容器

ものである。(第4図13、18)このような特異な幾何学的モチーフと動物文様とをともなう青銅容器はスマトラの Kerinci とマドゥラ島から発見され、ともに現在ジャカルタの博物館にあるものと全く共通⁽¹⁹⁾し、ドンソン文化の要素として、北ヴェトナムを中心とするドンソン文化領域の北部にはみられないものである。その文様要素は全体的にはドンソン青銅器のエスプリをもつていながら形態はじめていくつかの詳細な点で、それはドンソンと同時代に南方地域で作られたものようである。B. P. Groslier 氏は最近こうした現象に注意しつつ、ドンソン期にカンボジア、マレー、タイ、インドネシアにまたがる地域に、南方ドンソン文化(Dongsonian du Sud)として、多かれ少なかれ独立に発展したドンソン文化の一つの地域性を認めようとしている。⁽²⁰⁾

このように考えてみると、南方ドンソンに属する青銅器に表われた渦状文は、土器の文様に表われたヘラ描の渦状文が流行した地域、すなわち Sahuyuh-Kalanay 土器複合の占める地域の中で、それにオーバーラップして作られた可能性が強い。

以上、サムロン・セン貝塚が青銅器を伴なっていたかどうかを別にして、その土器複合を通じて青銅器文化、とりわけ南方ドンソン文化との関連が認められることを指摘しておきたい。

[II]

さて、サムロン・セン貝塚の様相が、一面においてドンソン青銅器文化と関連をもつものであれば、そこで当然問題となるのは、主要な生計活動としての農耕生産の存否であろう。北ヴェトナムの Dong-Soi 遺蹟をはじめ、Soi-tay 遺蹟⁽²¹⁾、雲南石寨山遺蹟⁽²²⁾などからは、青銅製の犁が数点発見されており、また雲南石寨山からは、稲作の生活を表現した絵画のある銅器が出土しているなど、ドンソン青銅器文化が水田稲作を基盤とした文化であることは明確である。

それでは、こうした稲作の痕跡をサムロン・セン貝塚の文化的様相の中にも認めることができるだろうか。出土した有肩石斧は、肩の張った直角型のもが発達しているが、積極的にこれらの用途を農具に推定するような材料をもっていない。ただ、今回の調査で採集した土器片の中には糶をおもわせる庄痕をその表面にもつものがあるが、まだ同定を得ていない。いまのところサム

サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について

ロン・セン貝塚出土の遺物の示めすところは、土錘、骨銛、骨鈎針などにみられる漁撈活動の様相である。それならば、サムロン・セン貝塚人の生計基盤を漁業にのみ規定してよいかどうか。この問題について、ひとつの接近法の可能性について考えてみたい。

すでに明らかにしたようにサムロン・セン貝塚が、メコン河とトンレ・サップ河が合着し、周域が淡水化した以後、すなわち内陸湿地帯が、かなり発達した以後に成立し、その先史環境が現在の自然環境と、それほど大きい差をもたないことを示めしている。遺蹟の立地点が、洪水限界線の外周、サヴァンナ低平原との接続帯に位置することは、その立地条件の特色をよく示めしている。後にのべるようにトンレ・サップ平野におけるこのゾーンは、浮稲栽培に最も適した場所である。そこで、この大規模な内陸湿地帯に展開する水田耕作が、ある範囲内の漁撈活動とよく複合した形で、ひとつの生計活動の型を示めしていることに注意をむけたい。⁽²³⁾

トンレ・サップ湖北岸、コンボン・トム省のコンボン・スヴァイヤサントック一帯のクメール農民は、毎年、稲の収穫が終了する一月の末か二月に、湖に近いムサ・クラン附近の洪水氾濫域へ約二〇〜二五キロメートルの距離を、全村あげて牛車で移動し、五月まで約四ヶ月間近く、水辺に杭上の小屋をつくり、滞在する。乾季に水位がもつとも低下するこの期間、農民たちは漁撈活動に従事し、一年分の農民の蛋白資源である淡水魚の捕獲を行

うとともに、浮稻の栽培を行なう。捕獲された魚は、プラホック(魚の塩漬けによる一種のペースト)²⁴、干魚、燻製など保存食料にする。浮稻は四月の末から五月にかけて、直播による播種を行い、翌年再び同所に移住して一月に収穫する。浮稻は洪水氾濫域または、その外周にひろがり、クメール語で *Veal* と呼ばれるサヴァンナ低平原の沼地など、洪水の湛水深が二メートル以上、それが長期間にわたり維持されるところで直播法により栽培される。品質は良好ではないが、収量は一般に多い。

ここにみられる漁撈活動と水稻耕作の密接な結びつきは、それが浮稻という原初的な稲作形態をとっている点に一層興味深いものがあるが、一般にトンレ・サップ低地における水田耕作と漁撈活動は結合して、ひとつの複合体をなしているようである。それは、とりわけ洪水氾濫域とサヴァンナ低平原における浮稻地帯、低標高で湛水期間の長い晩生稲地帯、標高がやや高いが、湛水期間中程度の季節稲や半季節稲の栽培地帯において強い結びつきがみられる。ただ、クメール農民によつて水稻耕作と並行して行なわれる漁撈活動は、いわゆる、家庭的な小規模捕魚の領域にとどまる。專業的規模の漁業は、十七世紀以降に当地に侵入したヴェトナム人やチャム、マレー人によつて、メコン河やトンレ・サップ河など大河川とトンレ・サップ湖の中で行なわれている。すなわち、水稻耕作に結びついた漁撈には、それ自体一定の限界があり、漁具、漁法に特色をもち、沼地、河川、水田など水体の利用の仕方に、水稻耕作に対応した体系がみとめられるなどの点に特

有の性格を見出すことができる。

トンレ・サップ平野における漁撈活動は、六月から十月にかけて雨季の間に増大したメコン河の水量が、トンレ・サップ湖をめぐる周辺の洪水林地帯にひろがり、そこで成育した魚族とともに、乾季に入ると、後退していく十一月頃に活発になる。すなわち漁撈活動の時期が、乾季の減水にともなう魚族の流下移動の時期に対応している。こうした水位変動にともなつて回遊性を示めすが、プランクトン食で鱗が銀白色コイ科の浮魚で、これに対してナマズ・ライギョなど底生性の魚族は移動性が比較的少い。水稻耕作と結びついた漁撈活動が、底生性の魚族を対象とする側面で、その特色をより強く示めす傾向がある。

すでにのべたように水田耕作民の漁撈活動の舞台は、水田、沼池、小河川 (*Stung*) に限られる。まず、水田における捕魚活動は、最高増水期から減水期のはじめにかけて行なわれる。最高増水期には釣魚が主体、これと同じ時期に柴を用いたワナ漁、たいまつの明りによる漁が行なわれる。乾季に入り、北の風が吹きはじめると、水が田からひきはじめる。農民はこの減水を待つようにして田の堤に割目の溝をつくつてウケ (*Trou*) を水平に設置する。ウケは、籐と竹製で、通常円筒形であるが、多くのヴァリエーションを含む。竹の柵を結つてヤナ (*Pnom*) をつくり、ウケと併用するものもある。次に、小河川での漁りは、雨季が終了した後、十一月に入つて減水期が始まり、雨季稲の収穫が終つてから行なわれる。主として浮魚を対象とし、ヤナーウケ漁法が主

体。他に銚、タモ網、投網、ひき網など。マチンの樹皮を用いた毒漁が行なわれる地方もある。沼地の漁りは非常に早くから続けられ乾季に行なわれる。又手網、投網、四ツ手網、Samra 漁、水位が低下したときにはひき網が用いられる。水位が最も低下した時には部落単位で伏籠 (Angrou) を用いる。これは水面がなくなつて泥となる乾季の終末まで最も気温の高い午後の時間に行なわれ、主として水底に生息する魚族が対象。クメール水田耕作民の最も特徴的な漁法の一つである。さらに沼池の水が完全に涸れてしまうと、農民は三〇五メートルの深さの穴を池の底に掘る。この中に柴を漬けて、翌年増水期に魚を集める。これは一種の収穫であつて、農民的な漁法といえる。このようにクメール水田耕作民の漁法は、水体の広さ、予想される魚の種類や量によつて逐次変えられ、ひとつの漁場が、各種の漁法によつて広く活用されている。

こうしてみると、トンレ・サップ平野における水稲耕作と漁撈活動は、内陸湿地によく適応した生活形態として結合した型を示していることが認められる。東南アジアにおける、ひとつの古い生活型である、いわゆる Fishing-Farming Culture の⁽²⁵⁾すなわち体系をそこにみる事ができる。ひるがえつてサムロン・セン貝塚の漁業文化についてみると、貝の採集がどこまで漁民文化の所産であるか一考の余地があるとしても、遺物の示めすところが、釣漁、網漁、銚などけつして小規模漁業の範囲を越えるものではないことを示めており、この地域にもつともよく現われて

サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について

いる水稲耕作との結びつきを無視するわけにはいかない。サムロン・セン貝塚の漁撈的要素が、おそらくは、浮稻などを水辺で栽培する農耕活動と結びついた生活形態の所産であり、内陸湿地帯に適應した漁撈—水稲耕作文化が、さかのぼつて、サムロン・セン貝塚の文化にも見出しうる可能性を否定できない。

この問題は考古学における生活の復原に関して、民族 (民俗) 誌的事象と遺物、遺蹟との関係相互の間に対応的に存在する同等的でない同型性を求めようとするアナロジーの方法である。現在、われわれには、まだこの考古学的解釈におけるアナロジーの明確な方法概念が用意されていない⁽²⁶⁾。一般的な意味において、アナロジーによる解釈は、遺蹟遺物のもつ、観察できない人間の文化的行動に対して、それに最も適切な観察しうる文化的行動を照し合せることによつて、その信頼性を分析することである。理論的に重要な点は、個々の具体的な類似よりも、抽象化された型式に、比較の基礎を置かねばならないことである。また、考古学的事象と、現在生きている民族 (民俗) 誌的事象との間にある大きな時間的、空間的間隙は、できうる限り少い方がよい。この点において、いまわれわれの求めるアナロジーの領域は、同一地域内における類似した生態的条件を基礎とする生計活動のレベルに限定している。その意味で、われわれの適用するアナロジーの条件はかなり恵まれているといえる。今後、方法論的手続きを厳密にしていくと共に、農耕活動を示めす直接的な資料を検出すること、貝塚を形成する遺蹟全体の発掘調査にもとづく居住様式の再構成

などが進めば、その推定も一層、精度を高めることになるう。

結 語

以上、サムロン・セン貝塚の文化が、一面においてドンソン青銅器文化、とりわけ、いわゆる南方ドンソン文化と関連のあること。内容としては、その遺跡立地からみて、ドンソン青銅器文化に伴う稲作文化を、同様にもつていた可能性のあることを考察した。カンボジアのドンソン資料はその編年の中で、比較的後出のものであると考えられるが、Groslier 氏のいう南方ドンソン文化 (Dongsonian du Sud) の概念については、単に南部のドンソン文化という地域的な差を示めすよりも、ドンソン青銅器文化が、北の起源地域を出て、インドシナ、マレイ半島、インドネシアの島嶼部へ拡散していく過程で、いろいろな要素を脱落し、あるいはつけ加えていく。そのプロセスにおける、地域を含んだ、ドンソン文化の時間的ズレを示めすものとして理解した方が、より明確な意味をもつと思ふ。⁽²⁸⁾

サムロン・セン貝塚は、東南アジア先史時代の標準遺跡として、重要な位置を占めてきた。しかしその文化段階、文化の内容については、考古学研究のはい時代に行われたものであるだけに、現在の研究に、たえうるような充分なものが知られていない。これは、発見例の少い東南アジア先史遺蹟の研究上、大きな欠陥となつている。今後、われわれは、遺蹟の発見につとめるとともに、従来、発見されている諸遺蹟を、新しい考古学的知見をもととして、再整理し、解釈していく努力を、あわせておこな

つていかなければならない。その意味で、サムロン・セン遺蹟の再検討は、重要な課題のひとつである。なお、一九六二年、Groslier 氏は、ゴム園で有名なチュップ高原の赤土地帯にあるシモットで、十四以上の文化層を含む新石器時代遺蹟を発掘しており、その土器や、石器はサムロン・センのものより一時期古いものであることを示めしている。⁽²⁹⁾シモット遺蹟の調査結果は、これからのプロト・クメール文化の研究に成果をもたらすことになるにちがいない。(10. July 1968)

- (1) H. Mansuy: Stations Préhistoriques de Samrong Sen et de Longprao (Cambodge) Hanoi; F.-H. Schneider, 1902.
- (2) idem, p. 2.
- (3) J. B. Noullet: L'âge de la pierre dans l'Indo-Chine (Matériaux pour l'Histoire Primitive et Naturelle de l'Homme, series 2, vol. 8, 1877).
- (4) J. Moura: Le Cambodge préhistorique (Revue d'Ethnographie, vol. 1. Paris, 1882). La royauté du Cambodge (Paris: Ernest Leroux, 1877).
- (5) J. B. Noullet: L'âge de la pierre polie et du bronze au Cambodge, d'après les découvertes de M. Moura (Archiver du musée d'Histoire Naturelle de Toulouse, Ire publication, Toulouse, 1879). [Reviewed by Émile Cartilhac in Matériaux pour l'Histoire Primitive et Naturelle de l'Homme, series 2, vol. 10, 1879.]

- (6) Edmond Fuchs: Station préhistoriques de Samrong-Sen, au Cambodge, son âge (Materiaux pour l'Histoire Primitiv et Naturelle de l'Homme, vol. 18, [2nd series, vol. 13] nos. 7-9, 1882).
- (7) Ludovic James: Les anciennes civilisations de l'Indo-Chine. L'âge de la pierre polie au Cambodge d'après de récentes découvertes (Bulletin de Géographie Historique et Descriptive, Paris, 1891).
- (8) H. Mansuy: Stations préhistoriques de Samrong-Sen et de Longprao (Cambodge) (Hanoi: F.-H. Schneider, 1902).
- (9) H. Mansuy: Résultats de nouvelles recherches effectuées dans le gisement préhistorique de Samrong-Sen (Cambodge). Suivi d'un résumé de l'état de nos connaissances sur la préhistoire et sur l'ethnologie des races anciennes dans l'Extrême-Orient méridional. Contribution à l'étude de la préhistoire de l'Indochine, III (Mémoires, Service Géologique de l'Indochine, vol. 10, fascicle 1, Hanoi 1923).
- (10) Olov R. T. Janse: Rapport préliminaire d'une mission archéologique en Indochine auprès de l'École Française d'Extrême-Orient (Revue des Arts Asiatiques, vol. 9, nos. 3-4, 1935; vol. 10, no. 1, 1936).
- Archaeological Research in Indo-China. vol. 1 (Harvard-Yenching Monograph Series, vol. 7, Cambridge, 1947).
- (11) H. Parmentier: Notes d'Archéologie Indochinoise, VII. Dépôt de jarres à sa-huỳnh. BEFEO, 24, 1924, 325-343.
- Madeleine Colani: Nécropole de sa-huỳnh, BEFEO, 13, 1937, 8-12.
- (12) G. Sieveking: Excavations at Gua Cha, Kelantan, 1954, FMJ, I and II, 1954-55, 75-138.
- B. A. V. Peacock: A Short Description of Malayan Prehistoric Pottery, Asian Perspectives, Vol. III No. 2, 1961, 121-159.
- (13) W. G. Solheim: The Archaeology of Central Philippines, Manila: 1964.
- (14) T. Harriison: The Great Gave of Niah, A Preliminary Report on Bornean Prehistory, M, 57, Article 211, 1957, 161-166.
- T. Harrison: The Caves of Niah, A History of Prehistory, SMJ, 7 (12) (New Series), 1954, 549-595.
- (15) W. G. Solheim: Two Pottery Traditions, Late Prehistoric Times in South-East Asia (Historical Archaeological and Linguistic Studies) Hong Kong; 1967.
- (16) L. Malleret: Quelque poteries de Sa-huỳnh dans leurs rapports avec divers sites du Sud-Est de l'Asie, Asian Perspectives, Vol. III, No. 2, 1961, 113-119.
- (17) L. Malleret: A propos d'une poterie du British Museum, Artibus Asiae, 20 (1), 1957, 50-54.

- (18) W. G. Solheim: The Archaeology of Central Philippines, A Study chiefly of the Iron Age and its Relationships (Monographs of the National Institute of Science and Technology, No. 10) Manila, 1964.
- (19) L. Malleret: Objets de bronze communs au Cambodge, à la Malaisie et à l'Indonesie, Artibus Asiae, 19 (3-4), 1956, 308-327.
- (20) B. P. Groslier: Indochine, Carrefour des Arts, Paris; 1961.
- B. P. Groslier: Indochina, Switzerland; 1966.
- (21) Olov Janse: Archaeological Research in Indo-China. Vol. 3. Belgium; 1958.
- (22) 雲南省博物館: 雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告 北京一九五九年版五・六・一一一
- (23) 近森 正: クメル水田耕民の捕魚活動 (『日本民族学会第七回研究大会研究発表要旨』) 一九六八
- (24) 近森 正: プラホックチャーカムとクメルの交渉関係について (『野帳から』〔『史学』vol. 40, Nos. 2-3〕 1967.
- (25) Carl O Sauer: 農業の起源, 1960. p. 37. 竹内常行他訳
- (26) 近森 正: 考古学におけるアナロジー (『あるから』No. 6) 1965.
- (27) 近森 正: ドンソン資料の型式学的研究 (其一) (『日本人類学会・日本民族学協会連合大会第十八回紀事』) 一九六四
- (28) 近森 正: サムロン・セン貝塚と青銅器文化との関連について (『日本考古学協会第三四回総会研究発表要旨』) 一九六

八

(29) 近森 正: カンボジアにおける最近の考古学活動 (『考古学ジャーナル』No. 15) 1967.

(本論は昭和四三年四月二十八日・三〇日、明治大学において開催された第三四回日本考古学協会総会に発表したものに加筆した。)

(付記) 本文校正中、九月三日から十日にかけて東京と京都で開催された第八回国際人類学・民族学会議に出席するために来日したハワイ大学の W. G. Solheim 氏及びバンロック国立博物館の Chin you-di 氏からドンソン青銅器と土器複合の関係について興味ある見解を聞くことができた。新しい資料はドンソン青銅器文化が、一層複雑な複合体であることを示めている。今後、その複合の分析をとおして地域的性格を明らかにしていかなければならないと思う。